

日本とカナダの大学間における COIL の実践報告
—学びを生み出す為の試み—

A Case Study Report on Collaborative Online International Learning (COIL) Practice
Between Japanese and Canadian Universities: Initiatives to Foster Student Learning

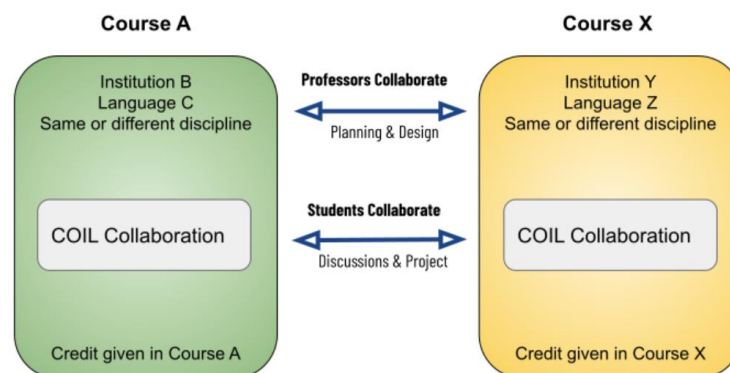
吉澤明子, マウントアリソン大学
Akiko Yoshizawa, Mount Allison University

1. はじめに

Collaborative Online International Learning (COIL: オンライン国際協働学習) は、異なる国や地域の機関がオンラインを通じて協力し、異文化コミュニケーションと相互理解を促進する教育として知られている。COIL は近年のテクノロジーの進化と共に益々身近な学習方法となり、従来の留学や対面での交流プログラムを補完する形で多くの教育機関で採用されている。2006年にCOILを開始したニューヨーク州立大学(SUNY)COILセンターは、COILの基盤として次の6点を挙げている。それらを視覚的に表したものが図1である。

- 分野を問わず実施可能で、学際的なコラボレーションにも効果的である
- 学生の主体的な学習とチームワークを促進する
- 異文化間の交流と理解を重視する
- 実施推奨期間は5～15週間である
- コース別で評価を行う
- 学習目標に適したテクノロジーツールを使用する (筆者訳)

図1 COILプログラムの図



ニューヨーク州立大学(SUNY)COILセンター. 「WHAT IS COIL?」.
<https://online.suny.edu/introtocoil/suny-coil-what-is/>. (参照 2023-06-11)

COILはコース全体を通じて行われることもあるが、一般的に数週間のモジュールとしてコース内で実施されることが多い。本実践においてもコース内の一部でCOILを実施した。本実践報告では、日本とカナダの大学間でのCOILデザインの詳細を紹介し、学生アンケートからの考察を行い、今後の課題を述べる。尚、本実践は2023年秋学期に向けてのパイロットスタディである。

2. COIL デザインと実施

2.1 実践の背景

本実践は、関西学院大学（以下 KGU）の教員からの打診により実現した。KGU は、アメリカの大学とも COIL を実施しているが、アメリカ側の学期の終了が早い為、実施期間が4月中旬から5月上旬とかなり短くなる。その為、大学間のオンライン交流後、学びを振り返る活動を行うことで COIL を補い実施している。今回、秋学期を通して COIL を実施することが可能な共修校を探しており、9月から秋学期を開始し、開講時期が重なる本校に打診があった。

マウントアリソン大学（以下 MTA）はカナダ東部に位置し、日本人との交流機会がほぼない環境にある。その為、COIL によりオンライン交流は、日本の大学生との貴重な交流の機会となる。今回の打診を受けることは、学生に異文化理解の機会を提供するだけでなく、言語学習へのモチベーションを高めることにもつながると考え、COIL を実施することとした。

2.2 対象者とコース目標

本実践の対象者は、KGU のコース受講生 11 名と、MTA のコース受講生 6 名であった。日本側は、英語を用いた異文化理解をコース目標としており、受講者の中上級英語学習者であった。全員が日本語母語話者である。一方、カナダ側は、初級後半の日本語習得をコース目標とする初級日本語学習者であった。6 名のうち、3 名は英語母語話者、2 名は幼少期にカナダに移住した韓国人学生で、英語はネイティブレベル、残り 1 名は上級英語話者の留学生であった。

表 1 対象クラスの詳細

	日本	カナダ
実施時期	2022 年秋学期	2022 年秋学期
コース目標	英語を用いた異文化理解	初級（後半）日本語の習得
対象者	中上級英語学習者	初級日本語学習者
人数	11 名	6 名

2.3 COIL デザインにおける配慮点

本実践をデザインするにあたり「時差」「コース目標の相違」「目標言語のレベル差」の 3 点に配慮する必要があるがあった。ここでは、これらの点にどう配慮し双方の学生に学びを生み出す COIL デザインを目指したかを述べる。

2.3.1 時差

カナダの大学があるニューブランズウィック州と日本には 12 時間の時差がある。その為、同期・非同期のハイブリッド型を選択した。同期ツールは Zoom、非同期ツールは Flip (<https://info.flip.com/>) とした。Zoom の選択理由は、ブレイクアウトルーム機能があること、接続が安定していること、教員学生共に使い慣れていたことである。Flip は、グループ内で短いビデオ、テキスト、音声メッセージを安全に投稿できる無料のアプリである。MTA ではこれまでも反転授業な

どに継続的に使用していた。メインビデオをクリックすることでコメントビデオが表示される形式の為、投稿場所や投稿者がはっきり分かれることから、今回のCOILデザインに適していると判断し選択した。

2.3.2 コース目標の相違

日本側のコース目標は「英語を用いた異文化理解」であり、COILに非常に適していた。それに対し、カナダ側は「初級（後半）の日本語の習得」をコース目標とした言語コースであった為、コース目標の調整が必要となった。異文化理解に関しては、これまでも授業内に日本文化紹介の時間を設け、文化的な違いを話し合う活動を取り入れることはあった。しかし、断続的で比重は必ずしも高くはなかった。そこでCOILをコースに組み込むにあたりコース目標に「異文化理解」の文言を明記し、評価にも加えることとした。尚、これらの変更は大学側からの了承を得た上で行った。

2.3.3 目標言語のレベル差

聞き手との間に目標言語以外の共通語が存在する場合、それに依存した「コード・スイッチング」が多く見られる（藤長 1996）。今回の交流においても言語的な制約のない状況では、より言語レベルの高い英語を「共通語」としてコードスイッチングが行われることが予測された。

そこで、カナダ側の学生にも日本語のインプットとアウトプットの時間を保証する方法を模索し、両大学の教員間で話し合いを重ねた。結果、次の3点を盛り込むこととした。

1. 非同期ビデオに日本側の学生による日本語のプレゼンテーションを含める
2. 非同期ビデオに相手学生への言語フィードバックを含める
3. 最後の同期交流では二つのセッションを設け、主要使用言語を指定する

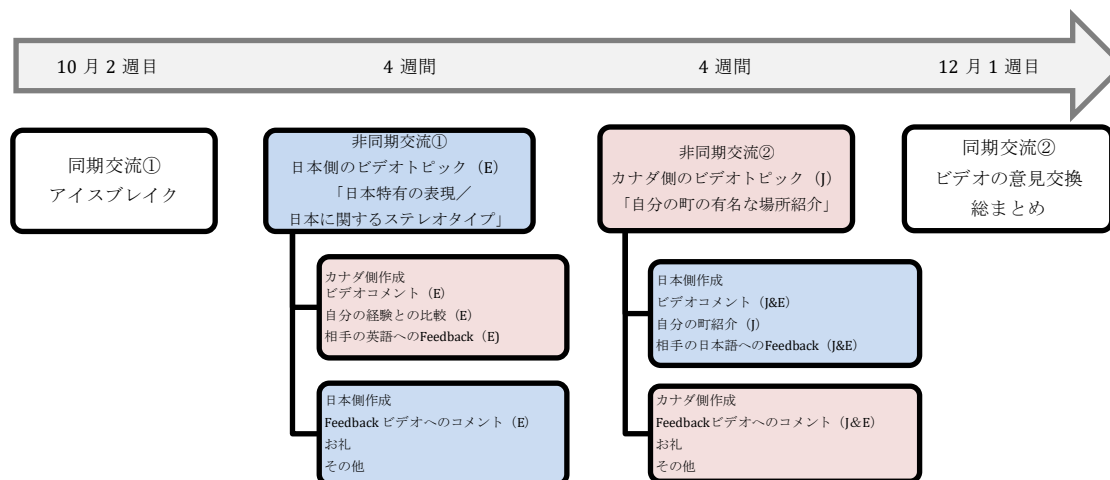
2と3については容易に合意に至ったが、1については日本側の教員から懸念が示された。懸念理由は、日本語によるプレゼンテーションは日本側の学生の英語学習にはつながらないこと、時間的にも負担があるとのことであった。

これに対し「やさしい日本語」のコンセプトを学生に導入することを提案した。「やさしい日本語」とは、言語のバリアを超え情報にアクセスしやすいよう簡潔で理解しやすい形で表現された日本語である。この「やさしい日本語」の取り組みは、異なる言語、文化背景を持つ人々のコミュニケーションの一助となっており、外国人観光客への情報提供、公共施設、医療機関、学校案内、初級学者向けの教材、災害時や緊急時の情報提供、高齢者や子供向けの情報等、実に様々な場所に広がっている。本実践でこのコンセプトを導入し、日本語のプレゼンテーションを作成することは、コミュニケーションの障壁を取り除く為の実践であり、異文化間コミュニケーション能力育成の一環となることを強調した。これにより日本側の承諾を得て、3点をデザインに盛り込むこととなった。

2.4 実施スケジュールとデザイン

実施時期は、2022年10月から12月であった。まず、同期セッション①ではアイスブレイクとして互いを知る為の活動を行った。その後、Flipを用いた非同期交流を1回目は日本側の大学、2回目はカナダ側の大学をメインに実施した。非同期交流は、メインビデオの作成期間を2週間、コメントビデオの提出期限を各1週間と設定した。同期セッション②では、これまでの交流全体を包括する意見交換を行った。図2は、COILデザインの概要を視覚的に表したものである。

図2 2022年実施のCOILデザイン



※図内のEは英語、Jは日本語の意

2.4.1 同期交流

同期交流は、全ての学生が出席できる時間をコース開始後に確認した。時差、他の受講科目の時間の都合上、日本時間の早朝、カナダ時間の夕方からの開始となった。実施時間は1時間である。

同期交流①では「共通点探し」「自己紹介」Wordwall (<https://wordwall.net/>)のルーレット機能を用いた「文化比較」の3つの活動を行った。この同期交流はアイスブレイクという目的上、交流時の使用言語は指定しなかった。

同期交流②は総まとめの活動である。交流時間を2つのセッションに分け、非同期交流のビデオに関するディスカッションを行った。前半を日本側、後半をカナダ側の時間とした。その際、前半のメインの言語は英語、後半のメインの言語は日本語（必要に応じて英語使用可）と使用言語を指定した。

2.4.2 非同期交流

非同期交流では、各大学共にメインの回があるよう2つのトピックを設定した。トピックはメイン大学のコース目標を優先し選択した。その際、相手側の大学にも必ず学びがあるよう配慮した。1回目を日本側メイン、2回目をカナダ側メインの順序で行った。これは、学期の後半に行うほうがカナダ側の学生が使用できる文法や句型が増える為である。尚、各ビデオに対し2名がコメントビデオを作成するようパートナーを割り当てた。

1 回目の非同期セッションは、日本側メインのセッションである。トピックは、日本人学生の英語レベルとコース目標にフォーカスし「日本特有の表現や日本人のステレオタイプ」とした。カナダ側の学生にとっても有益な情報が得られるトピックであることも配慮した。交流は全て英語で行った。

具体的な流れを説明する。まず、日本人学生は指定されたトピックに関するメインビデオを作成し Flip に投稿した。その際、必ず何らかの文献、動画などを引用することを義務付けた。カナダ側の学生はパートナーの学生のビデオを視聴し、コメントビデオを作成した。コメントビデオには、自国や自分の経験との比較に加え、相手の英語へのフィードバックを含むよう指示した。最後に日本人学生がコメント返しとお礼のビデオを作成し、一つ目のセッションを終了した。

2 回目の非同期セッションは、カナダ側メインのセッションである。トピックは「自分の町の有名な場所紹介」とした。これは既習文法項目の総まとめの位置づけである。トピック選びは日本の学生へカナダに関する情報提供ができることも考慮した。日本人学生は、Flip に投稿されたパートナーの学生のビデオを視聴し、自分の町の紹介を「やさしい日本語」を意識して作成した。その際、相手の日本語へのフィードバックも含めるよう指示した。最後に、カナダ側がコメント返しとお礼のビデオを作成し、二つ目のセッションを終了した。

3. 学生アンケート

3.1 アンケート実施時期と詳細

アンケートは、各同期セッション後に Google フォームを用いて両大学の学生を対象に2回実施した。1 回目のアンケートは、アイスブレイクセッションへのフィードバック、2 回目のアンケートは、COIL 全体に関するフィードバックを目的として行われた。

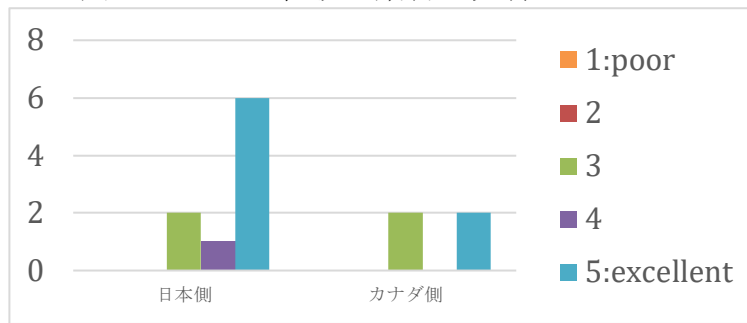
本稿では、COIL 全体に関する2 回目のアンケート結果について取り上げる。アンケートには日本側9名、カナダ側4名、計13名からの回答が得られた。回答者数が少ない為、個々の回答を詳しく観察することにより考察を行う。尚、回答は全て英語であったが、便宜上筆者が訳したものを掲載している。アンケート結果の (K) は KGU、(M) は MTA を示している。

3.2 COIL の経験に関する質問

3.2.1 COIL の経験への期待度

「COIL の経験は期待を満たすものであったか」との質問への各大学の回答は図3である。エクセレントの5を選択した学生がいる一方、3と評価した学生もいた。しかし、3と評価した学生の他の質問への回答を見る限り、ネガティブな回答は見られなかった。このことから3の評価は期待とほぼ同程度であったという意図だと考えられる。また、期待を下回ったという回答は各大学共になかった。

図3 COILの経験は期待に見合っていたか



3.2.2 COILにおけるポジティブな経験

「COILにおける最もポジティブな経験は何か」という質問への自由記述の回答の内容はa)～d)に分類された。()内の数字は回答数である。内容がいくつかの分類に跨がる場合は該当する分類全てにカウントした。紙面の都合上、各カテゴリー別に回答をピックアップし考察する。尚、回答内の下線は全て筆者による。

a) 他大学との交流に関する回答 (5)

- 海外の10代の学生と交流する機会がないので貴重な時間だった。 (K)
- 友達になってコミュニケーションを取ることができた。 (K)
- カナダの学生と話すことができた! (K)
- ネイティブスピーカーに英語で説明するのはいい経験だった。 (K)
- カナダの学生が熱心に積極的に会話をリードしてくれたので安心して英語を話せた。 (K)

ポジティブな経験として、海外に住む同年代の大学生との交流を挙げた学生が多かった。近年、オンラインツールは益々身近となり異文化交流も容易になっている。しかし、これらの回答からは、未だオンライン交流を貴重な機会と捉えられていることが分かる。大学間で行われるCOILのように、信頼できる機関から提供されるプログラムを充実させていくことは今後も有益だと考えられる。

b) 自己の言語能力の向上に関する回答 (4)

- 日本の学生の親切さと励ましが日本語のスピーキングの自信につながり発音するのにあまり緊張しなくなった。 (M)
- Zoomでリアルタイムのディスカッションができたので、英語で考える力がついた。 (K)
- カナダの学生は話すのが早いので、スピーキングとリスニングの両方の練習になった。 (K)

自己の言語能力向上に関する回答も多かった。本実践では、同期交流2回と非同期のビデオ交流を行ったことは既に述べたが、ここでは非同期交流に触れた回答はなかった。緊張感や達成感が得られやすいリアルタイムの交流は、自分の言語能力を実感する貴重な機会であったことが伺える。

c) 異文化理解に関する回答 (4)

- 相手の学生と各国の文化について話せたこと。(M)
- 違いを学ぶのが楽しかった。(K)
- 学校行事や文化について話せたこと。(K)
- 他の大学の学生と出会って彼らの視点を学んだ。(M)

異文化理解に関する回答では、自分と違う視点やバックグラウンドを持つ相手との交流をポジティブな経験と捉えていることが分かった。

d) 交流の雰囲気に関する回答 (4)

- カナダの学生が熱心に積極的に会話をリードしてくれたので安心して英語を話せた。(K)
- 日本の学生の親切さと励ましが日本語のスピーキングの自信につながって、発音するのにあまり緊張しなくなった。(M)
- みんなが自信を持って話す姿を見れたことが良かった。(M)

同期交流の雰囲気についての回答では、相手校の学生からのサポートや、目標言語を話すグループのメンバーの姿を評価する声があった。

以上のポジティブな経験に関する回答を見る限り、同期交流に対する回答が多く、非同期交流について触れた学生は少なかった。アンケート実施時期が同期交流直後であったことが影響した可能性もあるが、非同期交流に比べ、同期交流のほうが学習効果や達成感が実感されやすい傾向にあることが分かった。

3.2.3 COILにおけるネガティブな経験

「COILにおける最もネガティブな経験は何か」という質問への回答は次の通りであった。自由記述の回答を4つに分類し、まとめて考察する。

- a) 特になし (4)
- b) Zoomのブレイクアウトルームでの雰囲気や沈黙 (3)
- c) 自分自身の能力 (3)
- d) 指示の不明確さ (2)
- e) Zoomの時間帯 (2)

ネガティブな経験がなかったと答えた学生が最も多く(a)、これは最初の質問である「期待に見合っていた」という回答が多かったことと合致する。

Zoomでの雰囲気をポジティブな経験と回答した学生がいた半面、気まずさや沈黙を経験した学生もいた(b)。教員がブレイクアウトルームの様子を見に行った際も、積極的に交流をするグループと、会話が弾まないグループがあった。ブレイクアウトの指示を明確にしたり、司会を予め立てる等、より話しやすい雰囲気を作る為のデザイン上の工夫の必要がある。

自分自身の能力に関する回答(c)は「相手の話す内容が聞き取れないことがあった」「ネイティブスピーカーとの会話に自信がなくなった」等であった。また、「パートナーの学生に上手に言語フィードバックができなかった」という回

答もあった。いずれもネガティブな経験として回答されていたが、自分自身の能力を客観視する経験は今後の学習にとって貴重である。これらの気づきを学習意欲に繋げていく為の COIL 後の学生のフォローも大事な課題の一つだと言える。

3.3 技術や能力の向上に関する質問

「COIL を通して何らかの技術や能力が向上したと思うか」という質問に対し、10名がはい、3名がたぶんと回答した。いいえと回答した学生はいなかった。自由記述の回答を5つに分類し、回答が多かった a) と b) を考察する。

- a) スピーキング力 (5)
- b) 異文化、自分の国や言語への理解 (4)
- c) コミュニケーション能力 (3)
- d) 語彙力 (2)
- e) リスニング力 (1)

a) スピーキング力に関する回答 (5)

- 自分の英語力をあまり気にせず、言いたいことを伝えようとできた。 (K)
- 積極的に質問に答える力や、英語を聞き取る力がついた。 (K)
- 自分の言いたいことを瞬時に英語に直すスキルを伸ばせた。 (K)
- スピーキング力を伸ばすいい練習になった (M)

スピーキング力の向上に関する回答でも、リアルタイムのやり取りについて言及している学生が多かった。今回の取り組みでは同期交流は2回と必ずしも多くなかったにも関わらず、これらの回答が得られたことは、学生のリアルタイムでのアウトプットの機会が少ないことを示していると考えられる。

b) 異文化・自分の国や言語への理解に関する回答 (4)

- 他国の文化や多様性について考えることができた。 (K)
- 母国である日本についてより深く知ることができた。 (K)
- 英語での日本語の教え方も勉強になった。 (K)

異文化理解というと、相手側の理解という側面にフォーカスされがちだが、本実践を通して自国や自国の言語について捉えなおすことができたと感じた学生がいたことが分かる。自分自身の国や文化を見直すことは、異文化コミュニケーションスキルの向上だけでなく、偏見を減少させ成長を促進する重要な要素である。今後、異文化理解に関する回答が増えるようデザインを調整、改善していきたい。

3.4 COIL の留学の代替手段としての有効性

「COIL は実際の留学に替わる有効な手段だと思うか」という質問に対し、8名がはい、2名が多分、3名いいえと回答した。自由記述の回答では「COIL は評価するが、留学の代替手段にするのは難しい」という趣旨の回答が多く見られた。

- COIL は素晴らしく参加価値があったが、英語に頼ることが多かった。
留学は日本語のみの環境の為、語学力を伸ばすにはより適している。 (M)
- 留学のようにその環境に身を置いて学ぶほうが効果的だと思う。しかし、英語母語話者と話したり文化の違いを知ることは有益だった。 (M)

- COILも母語話者に英語を使う機会を提供しているが、Zoomでしか会えない為、留学のように友達を作るのは難しい。(K)
- COILは英語スキルの向上に適しているが、留学には英語スキルだけでなく、他のスキルも求められる。(K)

この他、COILを通して学習へのモチベーションが上がったという回答もあった。

- 非常に友好的なカナダの学生と交流できたことで、英語を勉強し異なる文化を体験するモチベーションが高まった。(K)
- 自分の英語力不足が分かった。留学の为一層頑張る勉強したい。(K)
- 手軽に言語学習の機会が得られ、異文化体験への動機付けになった。(K)

学生はCOILのオンライン交流の手軽さや効果を好意的に捉えている反面、交流の機会が限定的であること、留学することで目標言語と文化の中に身を置ことには代えられないという意識を持っていることが分かった。モチベーション向上に関する回答も踏まえると、COILを留学の前段階として取り入れることは十分な意義を持つと考えられる。

3.5 アンケート結果の考察

ここまでの今回の学生アンケート結果の考察をまとめる。

- 目標言語のレベル差がある場合もデザイン次第で学びは生み出せる
- 非同期交流に比べ同期の効果は実感されやすい傾向にある
- COILは、目標言語のアウトプットの貴重な機会となる
- 語学学習への動機付け、留学の前段階としてCOILは有効である

本実践では、初級学習者への言語学習の機会を十分に保証できるかが最も大きな懸念事項であった。しかし、アンケート結果からカナダ側の学生も学習成果を実感していることが分かった。つまり、目標言語にレベル差がある場合でも、COILのデザインにより学びを生み出すことが可能だということが示唆された。

4. 今後の課題と展望

本実践は、2023年秋学期の本実施に向けてのパイロットスタディとして実施された。ここでは、COILプロジェクトを通じた学習効果の向上に向けた課題と今後の展望について述べる。

1) 学生同士のやり取りの活性化と深化

今回、日本側の学生は「日本特有の表現や日本や日本人のステレオタイプ」というトピックで各自がビデオを作成した。いずれも興味深く、カナダ側の学生も多くのことを学んだ。しかし、各自が異なるテーマでビデオを作成する為、いずれも広く浅い議論に終始した感がある。特に1回目の非同期交流の使用言語が英語であることを考えると、より深い議論が可能であったと考えられる。これを踏まえ、次回はビデオの内容を絞り、予備知識を得る活動をした上で非同期交流や同期交流につなぐ等、より深い話し合いが可能となる方法を検討したい。

2) 非同期ツールの検討

日本側の大学はアメリカの大学との COIL で Padlet を用いている。Padlet は、画面に動画やコメントが全て表示される為、活発なやり取りが一目で分かりやすいのが魅力である。今回は、明確に担当が分かりやすいという理由で Flip を選択したが、意識的にクリックしなければ目的のビデオに辿り着けないことから、閉鎖的な印象もあった。それらを踏まえ次回の非同期ツールを再検討したい。

3) 同期オンライン時間の確保

COIL における同期交流の効果を考えると、可能な限り同期交流の機会を確保することが望まれる。この点については、既に 2023 年の日本側の大学の授業時間を一限目にし、同期交流の時間を確保しやすくするよう調整を行っている。

4) 学生同士の交流への関与の仕方

今回の COIL デザインでは、ビデオのやり取りの数や内容を指定していた為、最後のビデオの中に質問を含めていた学生に対して返答がされないままのケースが散見された。次回は自由度を高め、コメントやビデオ等、やり取りを活性化するように指定を緩めたり、よりコメントのやり取りが気軽にできる LINE 等のツールを併用することも検討したい。

5) 同期交流の際の雰囲気づくり

同期交流のブレイクアウトルームでは、取りまとめ役がない場合の沈黙が COIL へのネガティブな印象につながった。改善案として、積極的な学生を各ブレイクアウトルームに配置したり、司会役を予め決めておく等が考えられる。

以上、今後の COIL では、同期交流の回数を増やしたり、ディスカッションを活発にする為のデザインや非同期ツールの再考を視野にいれ、より深い学びにつながる実践を目指したい。

参考文献

- 北出慶子(2010)「留学生と日本人学生の異文化間コミュニケーション能力育成を目指した協同学習授業の提案_異文化間コミュニケーション能力理論と実践から」『言語文化教育研究』第9号(2),早稲田大学日本語教育研究センター言語教育研究会
- 藤長かおる(1996)「初中級日本語学習者のコミュニケーション能力についての一考察-話し手としてのコミュニケーション・ストラテジーの観察-」『日本語国際センター紀要』06, pp.51-69 国際交流基金日本語国際センター
- プレフューメ裕子・村田晶子(2021)「日本語教育におけるオンライン国際共修(COIL)の意義と可能性」CASTEL/J
- Council of Europe. (2001). Comon European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment. Cambridge University Press.
- Jones, E., & Killick, D. (Eds.). (2016). Online Intercultural Exchange: Policy, Pedagogy, Practice. Routledge.
- Nowlan, A. (2023, March 10). COIL with different L2 learning goals: Challenges and strategies [Conference presentation]. 28th International IATEFL Slovenia.